

しいのき



女性の針仕事

名誉館長 三 隅 治 雄

わが中野区が一画を占める武蔵野台地の、そのムサシの語源は、朝鮮語の苧麻^{ちよま}の種子を意味するモシシであろうとは、人類学・考古学の権威鳥居竜蔵氏のお説です。広い原野の一部に半島からの渡来人が苧麻を植え、その地の名が広がったのであろうというのです。その地名説には異論もありますが、苧麻の茎の靱皮^{じんび}からとった繊維を紡いで布を織る技術が、渡来人の教導によって向上をみたことは事実です。『萬葉集』巻十四の「多摩川晒す手づくり さらさらに なにぞこの見の こだ愛しき」の歌は、その手調りの苧麻の布を多摩川の清流で晒す生産風景を思い描いてのものです。納税のために絹を織ることはあっても、庶民の衣類はもっぱら苧麻製で、女たちは機織りから長針を使ってのつかみ縫いまで日夜励んだことでした。織布には女の魂が宿る、その魂を着てほしいとの願いが日本の女性にはあり、近世、木綿着が普及してからも、娘たちは、裁縫の習熟を嫁入りの資格としてまなび、針仕事に女性の生甲斐を感じる生活を育てたのです。

文化財よもやま話

茅の輪くぐり

『備後国風土記』逸文という奈良時代の書物に、次のような話があります。

旅をしているスサノヲノミコトが道に迷い一夜の宿を求めたとき、裕福な巨旦将来は拒否したのに代わり、その兄で貧しい蘇民将来は歓待してくれた。神は、疫病を流行らせ巨旦将来一族を滅ぼしたが、目印として腰に茅の輪を下げるように教えられていた蘇民将来家族は助かることができた。

以後、蘇民将来は疫病除けの神となりました。蘇民将来の信仰がある全国の寺社では、護符や、桃・柳の木で作った多角柱の信仰玩具などが授与されたり、蘇民祭が行なわれています。

人々は、生活の中で心身についた罪・災厄などを払い落とす禊ぎ・祓いを行い、健康と幸福を願ってきました。蘇民将来説話に登場する茅の輪もそのひとつで、神社では竹に茅を巻つけた直径二、三メートル程の輪が鳥居や境内に作られ、くぐると身の汚れが祓われ災難を免れるとされています。この年中行事は、一年を二つに分けた半年の最終日に、それまでの半年の無事を感謝し、これからの半年の無事を祈るため行われます。それぞれ、盆前6月晦日は夏越（水無月）祓い、正月前12月晦日は年越祓いと呼ばれます。

「ナゴシ」とは「和し」、つまり神のこころをやわらげるという意味です。中世の時代より宮中から民間まで行われていた茅の輪くぐりの行事にも、人々と神様の心の結びつきが感じられます。



沼袋・氷川神社の茅の輪くぐり

大地に眠る歴史

昔の人は遺跡をどう見たか(3)

今回は、日本を代表する弥生時代の青銅器である銅鐸について、古代の人々の解釈を見てみましょう。銅鐸とは何か？ 実は現在でもその正体は謎に満ちています。おおよそ一致した見解としては祭りに使われた道具であろうという点です。

銅鐸の謎の第一は、ある時一斉に姿を消した点にあります。それは地中に埋められることでこの世から姿を消したのです。最近の研究では、銅鐸の終焉は大体3世紀前半頃と考えられています。

ふたたび姿を現したのは、記録によれば、天智天皇7年(668)のことでした。『扶桑略記』という歴史書によるとこの年の1月17日に近江国崇福寺(現在の滋賀県南滋賀廃寺遺跡)の建設現場で土地をならしていたところ、高さ五尺五寸(165cm)の「宝鐸」が発見されたと記述されています。その後も、西暦713年、821年、860年にも発見され、いずれも天皇に献上されています。

銅鐸という呼称も713年段階につけられており、1300年たった今でも学術用語・一般名詞として用いられているのは不思議な思いがあります。

さて、姿を消して約400年後に復活した銅鐸でしたが、当初人々は何に用いたものなのか、まるでわからなかったようです。山中で発見された銅鐸の当りあえずつけたのが



寛政2年(1790)に兵庫県の山中で発見された銅鐸の当時のスケッチ

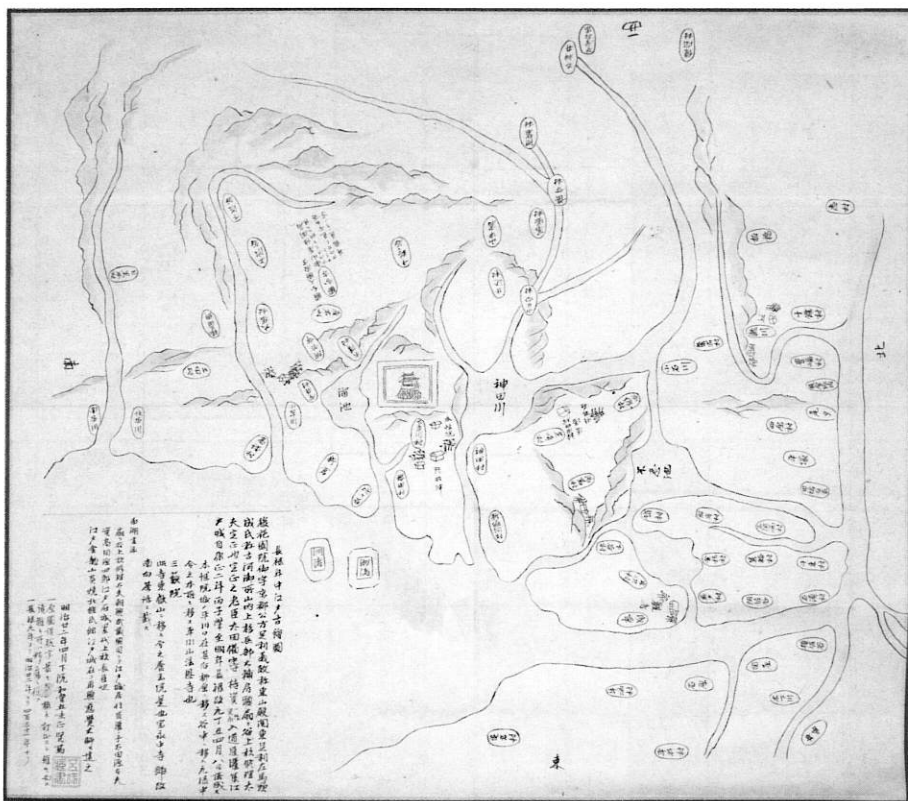
「宝鐸」「銅鐸」という名称ですが、はからずもこの命名は的を得たものでした。「鐘」が音を出すのに対して、「鐸」という字はゆり動かして音を出すという意味です。そのため当時の人々は銅鐸を見て、音を出す道具として認識していたことがわかります。現代の研究では、銅鐸には音を出す「聞く銅鐸」と「見る銅鐸」とがあることが明らかにされていますが、「聞く銅鐸」という見解は7世紀後半にはすでに提出されていたこととなります。(つづく)

誌上企画展

江戸図の世界

交通網も完備され、どこへ行くにも便利になった現代でも、地図は、私たちの生活の中で、意外と必要なものです。分かっているつもりでまっすぐ行ったら、道に迷ってしまった経験をお持ちの方も少なくないでしょう。ましてや、徒歩が移動手段であった昔では地図の役割は今にも増して重要であったことでしょう。

今回の誌上企画展では、当館が所蔵する古地図や複製地図の中から「江戸図」をテーマに、そのいくつかを紹介いたします。



「長禄江戸図」明治22年筆写（63.0×72.0cm）

古い？新しい？「長禄江戸図」江戸を描いた地図の中で最も古いものは、「長禄江戸図」といわれています。これは長禄元年(1457)に完成した太田道灌の江戸城が描きこまれているために付いた呼称です。

しかし、この地図は、現存する古いものでも安永7年(1778)以降の発行で、実際に長禄年間にあったものかどうか疑わしいものです。その後の年号である文明・長享・永禄・元龜

天正の江戸図も構図など内容はまったく同一であることと、石垣を持つ江戸城が描かれていることなどから江戸時代の好事家が作成したものが、複製され広く出回ったものと考えられています。

「長禄江戸図」は、筆写のものや木版のものなど20種以上が知られていますが、当館には、弘化4年木版と明治17年の印刷版、明治22年の筆写物の三枚が所蔵されています。

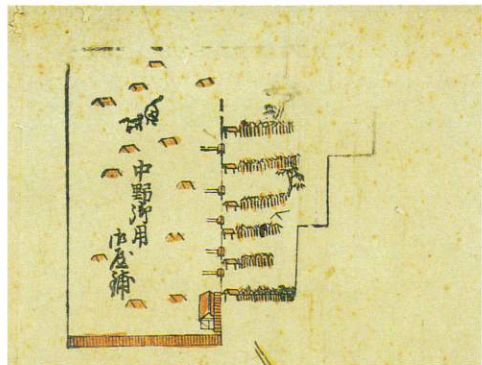


「江戸大絵図」宝永2年遠近道印作（165.0×191.0cm）

正確さの必要な時代

その後、江戸が大都市化するにしたがって地図の作成が盛んに行われました。いずれも江戸城を中心に据えて、上が西方向、右が北方向を指すもので、これが江戸図の定型化したスタイルとなりました。内容は、大名・武家屋敷・町人の町所在地などの情報が盛りられていましたが距離や縮尺は正確なものではありませんでした。やがて、1657年の明暦の大火で江戸のほとんどが焼失し、復興にあたった幕府は、正確な江戸図の必要性を痛感しました。そこで同年、大目付北条氏長が担当者となり、正確に測量した江戸図の作成に着手したのです。この実測図は幕府が所有しましたが、世に公開する必要性を感じた北条氏長は、江戸城を空白に表現するという条件で許可を得て刊行しました。この図は江戸城を中心に五枚の地図をつなぎあわせて江戸全体を

カバーするもので、刊行年から「寛文五枚図」と呼ばれるものです。この図はその後の伊能忠敬作成の江戸図に比べても勝とも劣らない精度を持っています。実際の測量者であり制作者は、^{おちこうどういん}遠近道印という人物です。



右上方部分に「中野御囲い」が描かれています。御囲いの様子を知る数少ない史料です。



「江戸図」文政13年須原屋茂兵衛板（74.0×87.0cm）

謎の人物おちこちどういん遠近道印

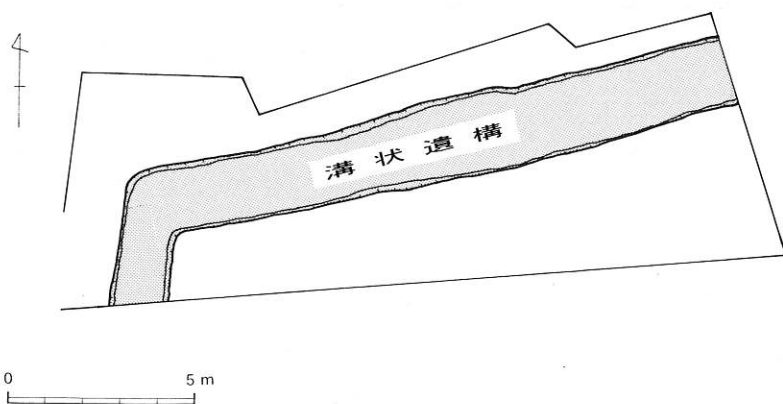
寛文五枚図の作者遠近道印おちこちどういんについては、その画期的な仕事に反して、最近まで実在すら明らかにされていませんでした。本名藤井半知、富山藩の医師として江戸詰めだった明暦頃に江戸図の測量に参加しました。以後めきめきと頭角を現し、1680年代には図翁と呼ばれるほど、地図制作者の第一人者になりましたが、その没年は不詳です。遠近道印の江戸図の特色は、測量技術に裏打ちされた精度ばかりでなく、どこかに絵画的・情緒的な雰囲気漂わせているところです。当館には彼の作品の一つ、宝永2年(1705)江戸大絵図が所蔵されています。

見て楽しい地図が流行する

寛文五枚図は、その後の江戸図の基本型となりました。寛文図の頃は、採色は手によるものでしたが、1800年前後から木版色刷りが主流となります。特に道路や河川、海岸線、には色を付け、主な神社仏閣はその特徴を示すイラスト表現になりました。また、大名屋敷には家紋を書き込むなど、利用者の便をはかるとともに、多分に色刷り絵画的なニュアンスが強くなりました。方位を示す羅針盤が表現されますが、それに反して地図そのものの精度はかなり落ちたものでした。見て楽しいものが流行したのです。当館には、その頃最も沢山の地図を発行した版元である、須原屋茂兵衛の文政13年(1830)の江戸図が所蔵されています。

遺跡紹介

向田遺跡、なぞの溝



溝状遺構平面図

弥生町六丁目全域と南台五丁目24～34付近一帯は、東京都遺跡台帳に中野区No.93向田遺跡として記載されています。この一部、弥生町六丁目6番で、マンション建設工事に先立ち、平成12年6月27日～29日に確認調査を行いました。

調査の結果、地下約1.7mの所で、幅約2mの溝状の遺構が約20mにわたり発見されました。

溝は、調査区南端から、北に向かって3.5m、東にほぼ直角に曲がって16m伸びており、調査区の外に続いていました。溝の平面形はL字型で、幅が1.7～1.9m、深さが0.5mで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱型でした。

溝のコーナー部付近からは、坏形土器が正立して出土しました。土器の内面には繊維質の有機物が残されており、何かが入っていたと思われます。これは有機物を入れて供えたものと解

釈されます。その他に、古墳時代後期の坏の口縁部片1点と土製品1点が出土しています。

この溝状遺構の性格としては、水田に付随する水路あるいは、居住空間にかかわる区画溝の二つの場合が考えられます。しかし、平面形がほぼ直角に屈曲していることから水路の可能性はないものと思われます。

今回調査した場所は、善福寺川の南50m、神田川の西250mの地点にあたります。このあたりは、中野区と杉並区の区境で向田遺跡も杉並区No.60遺跡に接続しています。これより約500m南の南台五丁目29番では、昭和54年の発掘調査により、古墳時代後期の住居跡2軒、住居内から土器、須恵器、土製勾玉、土製丸玉、旧石器時代の石器、縄文時代後期の土器破片多数が発見されています。



溝状遺構全景



坏形土器出土状況

古文書つづり

講釈師 見てきたような 評価をし

6～7月に歴史講座「日本史入門」を担当しました。実施して印象に残ったことや反省点は多々ありますが、今回はその一つとして講談と歴史学から評価と研究との関係を考えてみました。

講談とは近世に始り明治に盛行した寄席演芸。書物の内容に注釈を加えて判りやすく面白おかしく聴かせるもので講釈ともいい、講釈師という言葉はこの辺りからきています。落語の「噺す」に対して「読む」といわれるような朗読の芸術で、なかでも『太平記』が好まれ、それを専門とする人達は「太平記読」と呼ばれました。彼等は『太平記』そのものを人々に広める一方、出来事の注釈や人物評価といったものを創り上げ固定化する要因にもなります。これによって鎌倉時代末から南北朝期の歴史や、そのころ活躍した人々に対するイメージができあがっていき、後に戦前・戦中の国史や修身に行着きました。

ただし『太平記』から読みとれる史実と「太平記読」による評論とは明らかに別物です。歴史的人物や出来事へ善悪是非の判断をするのは講談ならではの興味ですが歴史研究ではありません。つまり「こういうことがあった」と「それについてこう思う」は区別が必要、ということです。

私たちは歴史上の出来事や人物を、つい個人的視座から評価してしまいます。が、当時には当時の常識や良識があり、今と同じく自分の大切なもののために一生懸命だったことを見落として現代的観点から正邪を述べても無意味です。また、ある特定の価値基準からはふさわしくないとして歴史的事実を無理矢理ねじ曲げるようなことは、歴史学はもちろん評価ですらありえません。

どう評価するかとは別に、過去や現在の事実を事実として認める程度の冷静な理性と知性はもちたいものですね。



▲『人倫訓蒙図彙』より流しの「太平記よみ」

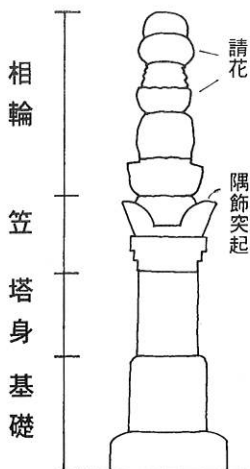
中野往來

吉良家の墓所

上高田4-14-1 萬昌院功運寺墓域内

上高田の寺町にある萬昌院功運寺は、萬昌院と功運寺の2つの寺が合併したものです。萬昌院は、天正2年(1574)に今川義元の子、氏真の第四子長得が、功運寺は、慶長3年(1598)に永井信濃守尚政が開山しました。この2つが大正時代に現在地に移って来て、昭和23年に合併したものです。

墓域内には、赤穂浪士の討ち入りで有名な吉良上野介義央の墓があります。吉良家は室町時代から続いた足利一族の名門で、萬昌院を菩提寺とし、義定、義弥、義冬、義央の四代にわたり葬られています。いずれの墓も宝篋印塔とよばれるものです。



これは、もともと「宝篋印陀羅尼經」を収めた供養塔のことで、中世以降は主に石で造られました。構造は、基礎・塔身・笠・相輪からなり、地域や時代によって特徴があります。

吉良家の4基は、ともに高さが2m程もある大型で、相輪部の彫が深く、隅飾突起が外方に向かって突出する点などが、江戸時代の作風をよく示しています。



事業報告

各種事業経過

2000年4月～9月

事業名	内容	期間
企画展	「収蔵資料品展『繊維の力』」	6/1～11/30
	「春季所蔵名品展－江戸・明治絵画の粹」	4/4～6/30
	「夏季所蔵名品展－染付の美」	7/8～9/30
歴史講座	日本史入門	
	「Ⅰ（通史編）原始・古代」 講師：石村篤史（当館専門研究員）	6/3
	「Ⅱ（通史編）中世」 講師：石村篤史（当館専門研究員）	6/10
	「Ⅲ（挿話編）古代中世悪役列伝」 講師：石村篤史（当館専門研究員）	6/17
	「Ⅳ（通史編）近世」 講師：石村篤史（当館専門研究員）	6/24
	「Ⅴ（特別講義）将軍吉宗と享保の改革」 大石学氏（東京学芸大学助教授）	7/8
	「Ⅵ（通史編）近代」 講師：石村篤史（当館専門研究員）	7/15
「Ⅶ（附論）博物館の古文書」 講師：石村篤史（当館専門研究員）	7/22	
古文書講座	入門コース 講師：大友一雄氏（国文学研究資料館助教授） 講師：太田尚宏氏（東京学芸大学講師） 講師：笠原 綾氏（NHK学園講師）	9/2～10/28 [毎週土曜8回]
文化財調査	青梅街道地区民俗調査	継続中
埋蔵文化財調査	本町三丁目21番民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	5/6
	沼袋一丁目17番民有地立会い調査	5/12
	白鷺二丁目48番民有地試掘調査	5/18
	南台三丁目6番民有地試掘調査	5/22～27
	江原一丁目25番民有地試掘調査	5/27
	江原一丁目20番民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	6/15
	江原一丁目20番民有地試掘調査	6/15
	東中野二丁目13番民有地立会い調査	6/16
	若宮二丁目20番民有地立会い調査	6/21
	弥生町六丁目6番民有地試掘調査	6/27～29
弥生町六丁目13番民有地立会い調査	8/8	
松が丘二丁目28番民有地試掘調査（国庫補助対象事業）	8/13	
江古田三丁目11番民有地立会い調査	8/29	
その他	博物館実習：7大学8名 夏休み学習相談・体験学習（火おこし体験・石臼粉ひき体験）	7/25～8/6 夏休み期間中

入館状況

2000年3月～2000年8月（延154日間）（人）

一般	社教団体	学校教育	合計
13,943	499	1,041	15,483

発行年月日2000年10月1日

編集・発行  山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022 東京都中野区江古田 4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX03(3319)9119

（印刷物登録番号 12中教社第4号）